

柳原※ [# 「火+華」、第3水準1-87-62] 子 (白蓮)

## 長谷川時雨

青空文庫



ものの真相はなかなか小さな虫の生活でさえ究められるものではない。人間と人間との交渉など、どうして満足にそのすべてを見尽せよう。到底及びもつかないことだ。

微妙な心の動きは、わが心の姿さえ、動揺のしやすく、信実は書きにくいのに、今日こんにちの問題の女史ひとをどうして書けよう。ほんの、わたしが知っている彼女の一小部分を——それとて、日常かたわ傍らにある人の、片っぱの目が一分間見ていたよりも、知らなすぎること、毎朝彼女の目覚める軒端にとまる小雀こすずめのほ

うが、よつぽど起居を知っているともいえる。ただ、わたしの強味は、おなじ時代に、おなじ空気を呼吸しているということだけだ。

火の国筑紫つくしの女王白蓮びやくれんと、誇らかな名をよばれ、いまは、府下中野の町の、細い小路のかたわらに、低い垣根と、粗雑な建具をもった小屋しょうおくに暮している燐子あきこさんの室へやは、日差しは晴やかな家うちだが、垣の菊は霜にいたんで。古くなつたタオルの手拭てぬぐが、日当りの縁に幾本か干してあるのが、妙にこの女人ひとにそぐわない感じだ。

おも面やせがして、一層美をそえた大きい眼、すんなりとした鼻、小さい口、こて鏝をあてた頭髪かみの毛が、やや細つたのもいたいたい。

金紗きんしゃお召の一つ綿入れに、長じゅばんの袖は紫友禪のモスリン。五つ衣ぎぬを剥はぎ、金冠をもぎとつた、爵位も金権も何もない裸体になつても、離れぬ美と才と、彼女の持つものだけをもつて、肅然としてゐる。黒い一閑張いっかんばりの机の上には、新らしい聖書が置かれてある。仏の道に行き、哲学を求め、いままた聖書たずに探ねるものはなにか——やがて妙諦みょうていを得て、一切を公平に、偽りなく自叙伝に書かれたら、こんなものは入いらなくなる小記だ。

燐子さんは、故伯爵前光さきみつぎよう卿を父とし、柳原二位のお局つぼねを伯母として生れた、現伯爵貴族院議員柳原義光氏の妹で、生母は柳橋の芸妓だといふことを、ずつと後のちに知つた女ひとだ。夜会ばやり、舞踏ばやりの鹿鳴館ろくめいかん時代、明治十八年に生れた。晩年こそ謹厳

いやしくもされなかつた大御所古稀庵老人でさえ、ダンス熱に夢中になつて、山県の槍踊りの名さえ残した時代、上流の俊しゅんぼ髻う前光卿は沐猴もくこうの冠かんしたのは違ちがう大宮人おおみやびとの、温雅優麗な貴公子を父として、昔ならば后きさきがねともなり得うる藤原氏の姫君に、歌人としての才能をもつて生れてきた。

実家だと思つていたほど、可愛がられて育つた、養家親さとの家は、品川の漁師だつた。その家でのびのびと育つて年頃のあまり違ちがわない兄や、姉のある実家に取られてから、漁師言葉のあらくれたのも愛あい敬きように、愛されて、幸福に、華はなやいだ生涯の来るのを待つていたが、花ならばこれから咲こうとする十六の年に、暗い運命の一步にふみだした。ういういしい花嫁君ぎみの行く道には、祝い

の花がまかれないで、呪いの手が開げられていたのか、京都下加茂しもの北小路家へ迎えられるとほどもなく、男の子一人を産んで帰った。その十六の年の日記こそ、涙の綴りの書出しであった。

芸術の神は嫉妬しつと深いものだという。涙に裂くパンの味を知らない幸福なものには窺うかがい知れない殿堂だという。

だが、燐子さんは明治四十四年の春、廿七歳のとき、伯爵母堂とともに別居していた麻布こうがいちよう 筈 町の別邸から、福岡の炭鋌王伊藤伝右衛門氏にとつぐまで、別段文芸に関心はもっていられなかったようだった。竹柏園ちくはくえんに通われたこともあったようだったが、ぬきんでた詠があるとはきかなかった。しかし、その結婚か

ら、燁子さんという美しい女性の存在が世に知られて、物議をも醸かもした。それは、伝右衛門氏が五十二歳であるということや、無学な鉞夫あがりの成なり金きんだなぞということから、胡砂こさふく異境いとつに嫁よめいだ。「王昭君おうしようくん」のそのように伝えられ、この結婚には、拾万円の仕度金が出たと、物質問題までが絡からんで、階級差別もまだはなはだしかったころなので、人身御供ひとみごころだとまでいわれ、哀れまれたのだった。

人身売買と、親戚補助しんせきとは、似ていて違っているが、犠牲心の動きか、強しいられたためか、父と子のような年のちがいや醜美はともかくとして、石炭掘りから仕上げて、字は読めても書けない金持ちと、伝統と血統を誇るお公卿くげさまとの縁組みは、嫁よめぐ女ひと

が若く美貌びぼうであればあるだけ、愛惜と同情とは、物語りをつくり、物質が影にあるとおもうのは余儀ないことで、それについて伯爵家からの弁明はきかなかつた。

だが、そのままでは、燦子さんはありふれた家庭悲劇の女主人公になってしまふ。甘んじて強いられた犠牲となつたのかどうか。それは彼女の後日が生きて語つたではないか。

この手紙は今年の春（大正十一年）中野の隠れ家がからうけた一節で、

只今お手紙ありがたく拝見いたしました。実はわたくし、二、三日前からすこし気分がすぐれませんで床とこについておりま

す。急に脈がむやみと多くなつて、頭がいやあな気持ちになる、なんとも名のつけられない病気が時たま起りますので。

でも今日は大分だいぶんよろしゅう御座いますから、早速御返事申上げて置こうと、床の中での乱筆よろしく御判読願ひ上げます。

（中略）仰せの通り世間のかくの噂うわさの中にはずい分、いやなど思う事もないでも御座いませんけど、これも致いたしかた方かたがないなり行きだと、今までもあまり気にかけたことも御座いません。

私信の一部を公にしては悪いが、わたしの筆に幾万言を費ついやして現わそうとするよりも、この書簡の断片の方がどれだけ雄弁に語っているか知れない。はじめからそういうふううわさに冷淡に、噂うわさを噂

として聞流す女性はすくない。

いづぞや九条武子くじょうたけこさんと座談のおり、旅行のことからの話ついでに、

「別府べつぷには燗あきさまの御別荘がおりますから、それはよろしう御座いますの。随分前から御一緒に行くお約束になっていて、やっと参りましたのよ。伊藤さんがお迎えながらいらつしやるはずでしたところ、風邪かぜをおひきになったって電報が来たものですから、燗さまは急いでお帰りになりましたの。

だから残念でしたわ。」

語る人のあでやかな笑顔えがお。それよりも前に、わたしはかなり重く信用してよい人から、こういうふうにも聞いていた。

白蓮さんは伝右衛門氏のことを、此<sup>この</sup>方<sup>かた</sup>が、此方<sup>この</sup>がといわれ  
るので、何となく御主人へ対して気の毒な気がして返事がし  
にくかった。それに、あの人の歌は、どこまでが芸術で、ど  
こまでが生活なのか——あの生活が嫌<sup>いや</sup>なのだとはどうしても  
思われない。

手紙のことといい、武子さんの話の断片といい、この歌の評と  
いい、突然なので、知らない読者には解しかねるであろうが、こ  
の間には、例の白蓮女史<sup>しつそう</sup>失踪事件があり、彼女の生活の豪華で  
あったことが、知らぬものもないというほどであり、和歌集『踏<sup>ふ</sup>  
絵<sup>みえ</sup>』を出してから、その物語りめく美姫<sup>びき</sup>の情炎に、世人は魅せら  
れていたからだ。

この結婚は、無理だというのが公評になっていた。作品を通して眺めた夫人は、キリスト教徒のためされた、踏絵や、火刑よりも苦しい炮烙ほうらくの刑にいる。けれど試ためす人は、それほど惨虐な心を抱いているのではない。それどころか、宝として確しつかりと握っていたのだとも思われる。冷たさにも、熱さにも、他の苦痛など、てんで考えている暇のない専有慾の満足と、自由を願うものとの葛藤かつとうだったのだ。もとより、いつも掴つかむものは強い力もち、かよわいものが折り伏せられるのは恒つねだが――

——これは前のつづきではない。前章は、大正十一年の二月に書いたのだが、その続きがどうしても見当らない、図書館にも幾度かいつて探してもらったが、続きの載<sup>の</sup>つたはずの雑誌はあつても出ていない。そこで、よく考えてみたらば、こんなことがあつたのを忘れて、続きが出たとばかり思つていたのでつた。

こんなこととは、燐子さんの兄さんの柳原伯が、わたくしの母をわざわざ横浜の手前の生<sup>なまむぎ</sup>麦<sup>たす</sup>まで訪ねられて、続稿を、やめさせてくれまいかと頼まれたのだつた。箱入り一閑張りの、細長い柱かけの、瓢<sup>ひょうたん</sup>箆<sup>ひ</sup>の花入れのお土産<sup>みやげ</sup>を取出して見せながら、母は言い憎<sup>や</sup>そうにいうのだつた。わたしは、そのふらふら瓢箆をみながら、止<sup>や</sup>めるとも止めないともいわないで、母のいうことだけ

きいていた。

「お困りだそうだから——」

わたしはただ笑った。ありとある新聞が、徹底的に書きつくしたのにな、今になってと。だが、その、今になってが困るのかなと思つた。だが、母の弱さにも嘆息した。母は合資の、倒れかけた紅葉館を建て直して、儲けを新株にして、株式組織に固め、株主をよろこばせたうえで、追出された。年老いて、我家も投り出しておいて、故中沢彦吉さんに見出されたからと、意気に感じて、夜の目も眠ないで尽した誠実はみとめられずに、喧嘩のように出されて、子たちがいる家にも足むけが出来ないと、死にもしかねない有様に、当時、草茫々とした、破ら家を生麦に見つけ

だして、そこに連れて来てあげて、やっと心持ちを柔らかさせた  
のではなかったか。そのおり、利益のあつたときには、長谷川さ  
ん長谷川さんとやさしくした株主のだけれが、優しい言葉をかけた  
か？ もとより、無智だった母の、法律的なことは知らずに、感  
情からのゆきちがいにはあつたとしても、権利、義務を主とした会  
社ではなく、酒と媚こびの附属する料理店で、お客であつて株主でも  
ある人たちは、一番やすく遊んで食べて、利益も得ている、その  
株主の一人で柳原さんもあつたのだ。顔かおなじみ馴染を利用するのが、  
あんまり現金すぎるとも思い、引受けた母までが嫌いやだった。だか  
らといって、それとこれを混じて、ものを書くような卑劣さを持  
つかとおもわれるより、そう思うほうが、よっぽど賤いやしいと思つ

たのだった。だが、原稿の続きは出なかったのだ。ガン張つても誌面は自分のものでないから、どうにもしようがなかったのだ。だから、つづきはわるいが、ここからは新しく書くことにする。

白蓮さんを見たのは、歌集『踏絵』が出て、かんだにしきちょう神田錦町の三

河屋という西洋料理やで披露があつたとき、佐佐木信綱先生から、御招待があつたのでいったときだった。柳原伯夫人のお姉さんのかばやま榊山常子夫人がかいぞえ介添で、しつとりとしていられたが、白蓮さんには『踏絵』で感じた人柄よりも、ちよくで、うるおいがないと思つたのは、あまりに、『踏絵』の序文が、

「白蓮」は藤原氏の娘なり「王政ふたたびかへりて十八」の

秋、ひむがしの都に生れ、今は遠く筑紫つくしの果はてにあり。——半生よいうや漸ようやくすぎてかへり見る一生の「白き道」に咲き出でし心の花、花としいはばなほあだにぞすぎむ。——さはれ、その夢と悩みと憂愁と沈思とのこもりてなりしこの三百余首を貫ける、深刻にかつ沈痛なる歌風の個性にいたりては、まさしく作者の独創といふべく、この点において、作者はまったく明治大正の女歌人にして、またあくまでも白蓮その人なり。ここにおいてか、紫のゆかりふかき身をもて西の国にあなる藤原氏の一女を、わが『踏絵』の作者白蓮として見ることは、われらの喜びとするところなり。

こういふ書きかたであつて、しかも『踏絵』が次に示すような、  
 哀愁をおびた、パッションノート情熱的ななかに、悲しい諦あきらめさえみせてい  
 るので、感じやすいわたしは自分から、すっかりつくりあげた人ひ  
とがら品を「娼娥じやうが」というふうにきめてしまつていたのでつた。  
 『踏絵』の装幀そうていが、古い沼の水のような青い色に、見返しが銀  
 で、白蓮にたとえたとかきいたが、それからくる感じも手伝つて、  
 娼娥じやうがと思ひこませ、この世の人にはない気高さを、まだ見ぬ作者  
 から受取ろうとしていた。

だが、わたしは、そのおりの印象を、ふらんすの貴婦人のよう  
 に、細ほそやかに美しい、凜りんとしてるといつている。そして、泉鏡  
 花さんに、『踏絵』の和歌うたから想像した、火のような情を、涙の

ように美しく冷たい体からだで包んでしまった、この玲瓏れいろうたる貴女きじよを、  
貴下あなたの筆で活いかしてくださいと古い美人伝では、いつている。貴下  
のお書きになる種々な人物のなかで、わたくしの一番好きなのは、気  
高い、いつも白と紫の衣きぬを重ねて着ているような、なんとなく靈  
気といったものが、その女をとりまいている。譬たとえていえば、玲  
瓏たる富士の峰が紫に透すいて見えるような型の、貴女をといつて  
いる。これはだいぶ歌集『踏絵』に魅せられていた。

たしかに、わたしは『踏絵』のうたと序文によつぱらいすぎて  
はいたが、昔ならば、女御にようご、后きささぎがねとよばれるきわの女性が、つ  
くし人びとにさらわれて、遠いあなたの空から、都をしのび、いまは  
哲学めいた読よみものを好むとあれば、わたしの儂はかなんだロマンスは上

々のもので、かえって実在の人を見て、いますこしうちしめりて  
 おわし候え、と願ったのもよんどころない。それほどに『踏絵』  
 一卷は人の心をとらえた。

われは此<sup>ここ</sup>処に神はいづくにましますや星のまたたき寂しき夜  
 なり

われといふ小さきものを天<sup>あめ</sup>地<sup>つち</sup>の中に生みける不可思議おも  
 ふ

踏絵もてためさるる日の来<sup>き</sup>しごとくも歌反<sup>ほぐ</sup>故<sup>こ</sup>いだき立てる火の

前

吾<sup>われ</sup>は知る強<sup>も</sup>き百千<sup>もち</sup>の恋ゆるゑに百千の敵は嬉しきものと

天地あめつちの一大事なりわが胸の秘密とびぢれの扉誰か開きぬ

わが魂たまは吾われに背そむきて面見おもせず昨日きのうも今日も寂しき日かな

骨肉こつにくは父と母とにまかせ来ぬわが魂たまよ誰たれにかへさむ

追憶とぼりの帳とばりのかげにまぼろしの人ふと入れて今日もながむる

船ゆけば一筋白き道のあり吾われには続く悲しびのあと

誰たれか似る鳴けようたへとあやさるる緋房ひぶさの籠かごの美しき鳥

歌集のようになるが、もう二、三首ひきたい。

殊ことごと更さらに黒き花などかざしけるわが十六の涙の日記

わが足は大地だいちにつきてはなれ得ぬその身もてなほあくがるる

空

毒の香たきて静かに眠らばや小がめの花のくづるる夕べ  
 おとなしく身をまかせつる幾年は親を恨みし反逆者ぞ  
 殉教者の如くに清く美しく君に死なばや白百合の床  
 昔より吾われあらざりし其世より命ありきや鈴蘭の花  
 息絶ゆるその刹那せつなこそ知るべくや死の趣恋のおもむき

三十三歳の豊麗な、筑紫つくしの女王白蓮は、『踏絵』一卷でもろもろの人を魅了しつくしてしまつて、銅御殿あかがねごてんの女王火の国の白蓮と、その才華美貌を讃える声は、高まるばかりであつた。伝右衛門氏は、それほどひとの女性を、金で掴つかんでいるというふうに、好意をよせられないのもしかたがなかつた。

だが、その時でも、どこまであの生活がいやなのか、あの歌のどこまでが真実なのかといったのは、彼女をよく知っていた人だと私は前にもいったが――

## 三

大正十年十月廿二日の、『東京朝日新聞』朝刊の社会面をひらくと、白蓮女史失踪しっそうのニュースが、全面を埋めつくし、「同棲おっと十年の良人を捨てて、白蓮女史情人の許もとへ走る。夫は五十二歳、女は二十七歳で結婚」と標柱して、左角の上には、伊藤燐子あきこの最近の写真の下に宮崎竜介りゅうすけ氏が一つ枠わくにあり、右下には、

伊藤伝右衛門氏と燐子さんの結婚記念写真が出ていた。

その記事によると、十月二十日午前九時三十分の特急列車で、福岡へかえる伝右衛門氏を東京駅へ見送りにいったまま、白蓮女史は旅館、日本橋の島屋しまやへかえらず、いなくなってしまったということや、恋人は帝大新人会員の宮崎竜介氏であることや、結婚の間違っていたことや、柳原家の驚きや、まだ福岡の伊藤氏は知らないということが、紙面一ぱいで、誰にも、ああと叫ばせた。

次の日、廿三日の朝刊社会面には、伝右衛門氏へあてた、燐子さんからの最後の手紙——絶縁状が出た。全文を引かせてもらおうと、

私は今貴方あなたの妻として最後の手紙を差上げます。

今私がこの手紙を差上げるといふことは貴方にとって、突然であるかもしれませんが私としては当然の結果に外ならないので御座います。貴方と私との結婚当初から今日までを回顧して私は今最善の理性と勇氣との命ずる処に従つてこの道を取るに至つたので御座います。御承知の通り結婚当初から貴方と私との間には全く愛と理解とを欠いていました、この因襲的結婚に私が屈從したのは私の周囲の結婚に対する無理解とそして私の弱少の結果で御座いました。しかし私は愚おろかにもこの結婚を有意義ならしめ出来得る限り愛と力とをこの中に見出して行きたいと期待し、かつ努力しようと決心しました。私がはか儚ない期待を抱いて東京から九州へ参りましてから今は

もう十年になります。その間の私の生活はただ遣瀨やるせない涙を以ておおわれました。私の期待は凡すべて裏切られ私の努力は凡て水泡に帰しました。貴方の家庭は私の全く予期しない複雑なものでありました。私はここにくどくどしくは申しませんが、貴方に仕えている多くの女性の中には貴方との間に単なる主従関係のみが存在するとは思われないものもあります、貴方の家庭で主婦の実権を全く他の女性に奪われていたこともありました。それも貴方の御意志であつた事は勿もちろん論です。私はこの意外な家庭の空気に驚いたものです。こういう状態において貴方と私との間に真の愛や理解はぐくが育まれようはずがありません。私はこれらの事についてしばしば漏らした不平

や反抗に対して貴方はあるいは離別するとか里方さとかたに預ける  
とか申されて実に冷酷な態度を取られた事をお忘れにはなり  
ますまい。またかなり複雑な家庭が生む様々な出来事に対し  
ても、常に貴方の愛はなく従つて妻としての価あたを認められな  
い私はどんなに頼り少く淋しい日を送つたかはよもや御承知  
なきはずはないと存じます。

私は折々我身の不幸を果敢はかなんで死を考えた事もありました。  
しかし私は出来得る限り苦悩を、憂愁を抑おさえて今日まで参り  
ました。この不遇なる運命を慰めるものは、唯歌ただと詩とのみ  
でありました。愛なき結婚が生んだこの不遇と、この不遇か  
ら受けた痛手いたでから私の生涯は所詮しよせん暗い帳とばりの中に終るものだ

と諦めた事もありました。しかし幸にして私には一人の愛する人が与えられて私はその愛によつて今復活しようとしていたのであります。このままにして置いては貴方に対して罪ならぬ罪を犯すことになることを怖れます。もはや今日は私の良心の命ずるままに不自然なる既往の生活を根本的に改造すべき時機に臨みました。虚偽を去り真実につくの時がまいりました。依つてこの手紙により私は金力を以つて女性の人格的尊厳を無視する貴方に永久の訣別を告げます。私は私の個性の自由と尊貴を護りかつ培うために貴方の許を離れません。永い間私を御養育下された御配慮に対しては厚く御礼を申し上げます。

二伸、私の宝石類を書留郵便で返送致します。衣類などは照<sup>て</sup>  
<sup>るやま</sup>山支配人への手紙に同封しました目録通り、凡<sup>すべ</sup>てそれぞれ  
に分け与えて下さいまし。私の実印は御送り致しませんか、  
もし私の名義となつていゝるものがありましたらその名義変更  
のためには何時<sup>いつ</sup>でも捺<sup>なつ</sup>印<sup>いん</sup>致します。

十月廿一日

燁子

伊藤伝右衛門様

この手紙が出るまでもなく、前日の家出だけでも、事件はお釜<sup>かま</sup>  
の湯が煮えこぼれるような、大騒ぎになっていた。各新聞社は、

隠れ家の搜索に血眼ちまなこだったが、絶縁状が『朝日新聞』だけへ出ると物議はやかましくなった。しかも、その手紙が、肝心な夫伝おつと右衛門氏の手にはまだ渡っていないのに、新聞の方がさきへ発表したというので騒いだ。黒幕があるというのだ。

おなじ廿三日の、おなじ欄に、伝右衛門氏の九州福岡での談話が載った――

「天才的の妻を理解していた」という見出しで、

互たがいの世界はちがっていても、謙遜けんそんしあうのが夫婦の道、だ  
が絶縁状を見たうえは、何とか処置する。

勿論、今朝けさの（廿二日）新聞で事情の大略は知ったが、しかし、そんな事が実際あるべきものとは思われない。燐子とし

ても、そんな無分別なことを果してしたものでらうか、本月末には博多はかたに帰つて来る約束をしてある。家庭のことを振りかえつて見ても、不愉快や、不満に思うふしは毛頭もうとうあるはずがないと思います。随分我儘わがままな女です。何不自由なく、世間せけんから天才とか何とかいわれるまで勉強もさせ、小遣こづかいだつて月五十円はおろか一万円にもものぼることすらある。あの女を、伊藤なればこそ養つているなどと噂うわさもある。それは柳原さんや、入江いりえさんも知つている。私は田舎者の無教育ですから、燐子が住んでいる文学の世界などは毛頭知りません。だからその点遠慮して、どんな事をしようが、何一ツ小言こごとをいった事はありません。

「忘れがたき別府の一夜」の題下には、大正八年一月末に（『踏絵』が出てから数えて三年目）湯の町の別府に、宮崎氏が白蓮さんをつたねた。その後『解放』の同人たちに噂が高く、春秋の上京に、散歩、観劇などを共にしていたとある。

雑誌『解放』は、吉野博士を中心にして、帝大法科新人会の人たちが編<sup>へん</sup>輯<sup>しゅう</sup>をしていた、高級な思想文芸雑誌だった。白蓮女史の劇作「指鬢外道」<sup>しまんげどう</sup>を掲載することについて、誰かがうちあわせにゆくことになり、宮崎氏がいったのだった。そのあとでは、宮崎氏の机上はうずたかくなるほど、電報で恋の歌がくるというので、みんなが羨<sup>うらや</sup>んだということだった。

この事件についての、世間の反響の一部分を、おなじ新聞からとってみると、廿三日のに、九大の久保猪之吉博士夫人より江さんが——この夫妻も、帝大在学「雷会」時代からの歌人で、

上京前に訪問したら、涙ぐんで、めいりこんでいて「伊藤が愛がないのでさびしくてしかたがない。高い崖がけの上からでも飛降りて死んでしまいたい」といつていたが、感情が昂こじてこんな事になったのか、ある意味で白蓮さんはうたを實行されたのだ。

と語っている。

また、九条武子さんは、まあと大きな吐息をついて、

只今が初耳でございます、随分思いきった事をなさいました

ねえ。あの方とは、昨年お目にかかりました後は、お互にちよいちよいゆき来きはしておりますが、唯うたのお友達というだけ、それほど深い話ありません。先日も九州でおめにかかりましたが、それほど深いお悩みのあることは、素振そぶりにもお見せになりませんでした。御主人は太っ腹な、それは気持ちのいい方です。まさか短気なことは遊ばしはしませんでしょうね。お年もとり、御思慮も深い方ですが、どうなる事でしょう。

と、さすがに友達の身を案じて、じつとしてはいられぬという面もちだつたとある。

博多中券の芸妓ふな子は二十歳で、白蓮さんに受出されて、

はかたなかけん

おていさんという本名になって、伊藤家にいる。その女の<sup>ひと</sup>いうのには、

燦子さんは、お父さまにつかえているつもりだといって、平<sup>へ</sup>いせい  
生<sup>いせい</sup>からさびしそうにしていたが、(私が) 妾<sup>めかけ</sup>になったもの  
うけだされたのも、奥さまからなので、嫌<sup>いや</sup>だけれど納得した  
のに――

といっている。

廿三日附朝刊には、論説も「燦子事件について」とあつて、その概略をつまんでみると、

燦子の事件はあくまで慨嘆すべきものか、あるいはかえつて  
謳歌<sup>おうか</sup>すべきものか、吾人<sup>ごじん</sup>はこれを報道した責任として、ここ

にいささか批評を試みたい。(略)

彼女の精神生活は甚だ同情すべきものだが、技巧と粉飾が臭気の高い歌で訴えるように事実苦しみぬいていたかどうか。

(略) この行動が、はたして自動的か他動的か、これもまた批判してその価値をさだめる有力な材料でなくてはならない

——燐子事件の真相と燐子の思想とによつてわかるるものと思う。更に細論の機会をまたんとす。

といっている。

廿五日ごろになると、帝大法科の教授連が批判回避の申合せをし、白蓮問題は、<sup>しばらく</sup>暫く何もいうまいということになったが、牧野、

穂積<sup>ほづみ</sup>両博士が興味をもっているとあり、投書の「鉄<sup>てつ</sup>箒<sup>そう</sup>」欄が段々やかましくなっている。

<sup>はくそん</sup>

白村の近代の恋愛観のエッセイを読み続けてゆくと、家名、利害をはさまず、人格と人格の結合、魂と魂との接触というが、白蓮、伊藤、宮崎<sup>おのおのたど</sup>各々<sup>おのおのたど</sup>辿るべきをたどった。（鉄箒）

「法廷に立て」伝右衛門が白蓮女史に送った手紙誰が書いたのか、甚だもって伝右衛門らしくない。彼がとる態度は、有夫<sup>かん</sup>姦<sup>かん</sup>の告訴、白蓮は愛人をともなつて法廷に立て。（鉄箒）

「栄華の反映」自分を崇拜している年下の男の方が、自分の弱点を知る石炭みたいな男より我儘<sup>じょうぎ</sup>が出来るのが当然だが愛がなくてももの同棲十年は、相当情誼<sup>じょうぎ</sup>を与えたはずだ。（鉄

箒)

天才は不遇な裡うちに味もあれば同情もあるのだ——虚名を求めて彼女の轍てつを踏むときバクレンとなるなかれ。(鉄箒)

「鉄箒」欄がいつている伝右衛門の手紙というのを引きたいが、夕刊紙かまたは他紙のであつたのか、見当らなかつた。震災が中であつたので、とつておいた参考紙も失なつてしまつたのでいまではわからない。

で、柳原家の方では、合理的処置——円満離婚の上で自邸に引取る方針だ。その上で当事者の考えで解決するといひ、宮崎氏は、燁子はきつと保護する。ただ父に(滔とうてん天氏)叱しかられはしまいか

と、いかにも若々しい学徒の純情でいつている。

くりやがわはくそん

厨川白村氏の「近代の恋愛観」が廿回ばかりつづいて、やはり『東朝』に出ていた時分だったので、白村氏は「鉄箒氏」に答えて、

——今日の見合いの方法に、改良を加え青年男女に正当な接触を与えるのが、今日の社会のために望ましい事である。私は本紙に、近代の恋愛観というのを草そうし、連載中燐子事件突発。近代生活の重要な問題として、概括的に一般に恋愛と結婚について述べたかの一文の中に、今回の事件について、凡すべて私の見解にはあまり明めい瞭りょうすぎて、露骨なほど明かに書

いておいたから、いま質問を受けるのを遺憾と思う。

——今度の行動には多くの欠点手落ちがあつた。絶縁状が相手に落ちないうちに発表され、自分が独立しないで多くの人に依頼したこと、自ら妾を夫に与えていた事、非難の点多し。これは外面的な、従属的なことである。

——今度のようなことは、男でも女でもちよつと思いきつて決行出来ないのが普通だ。それを断行した事によつて、このインフェルノから救われたのは、独り『踏絵』の女詩人ばかりではなく、伝右衛門氏にとつてもまた幸福であつたことを考えねばならぬ。(概略)

白蓮さんの方で、着物も指輪も手紙をつけて送りがえしたとい  
えば、伝右衛門氏の側では、絶縁状は未開封のまま突きもどすと  
いい、正式に離婚をするといっている。各々の立場が違って、宮  
崎氏の方は、燐子さんの環境から見ても、どこまでもああした、  
自覚的態度を強調させようとし、事件が大袈裟おおげさになることは、も  
とより覚悟の上であつたろうが、絶縁状の字句が、何やらん書生  
流で、ほんとに、心しんから底から、がまんがまんのなりかねた女がつきつ  
ける手紙としては——情熱の歌人の書いたものとしては、おなじ  
キツパリしすぎるなかに欠けたもののある感じと、踊らせよう、  
騒さわぎたさせようとするいがあるふうにも感じられる子供っぽい  
理窟りくつ、世馴よなれない腕わんぱく白はくさがあるのとは反対に、伝右衛門氏の方

で、正式に離縁というのは、どことなく、どっしりして、わるあがきがちよつと去いなされたかたちにもとれる。

廿三日には隠れ家も知れて、黒ちりめんの羽織を着て、面おもやつれのした写真まで出ていた。軽い風邪かぜで寝ねていて、親戚しんせきの人に面会を避けると、自殺の噂が立ったり、警察でも調べたとあつた。

そのころ、丁度ワシントン会議のあつたところで、徳川公爵や、加藤友三郎大将の両全権が、鹿島丸かしまるでアラスカの沖を通つていいる時に、日本からの無電は白蓮事件をつたえ、乗組の客はみんな緊張して、すさまじい論戦が戦たたかわされた。それは廿四日のことだとも伝えてきた。

と、いうだけでも、どんなにこの事件が、何処<sup>どこ</sup>もかもを沸騰させたかということがわかるではないか。まして生家の御同族がたをや！ 真に、白蓮燐子は身の置きどころもない観だった。

だが、ああいった武子さんは、自分で綿入れを縫って隠れ家へ届けている。

わたしが訪ねたのは、もう写真班の攻撃もなくなった、燐子さんの廻りも、やっと落附いてきた時分だった。山本安夫と表札は男名でも、燐子さんと台所に女の人がいただけだった。ふと、瘦<sup>や</sup>せた女<sup>ひと</sup>の、帯のまわりのふくよかなのが目についた。そのことを、どこの何にも書いてなかったのは、気がつかなかったのかも知れ

ないが、煩<sup>うる</sup>さが倍加しなくてよかったと、わたしは心で悦んでいた。晒<sup>さら</sup>し館<sup>あん</sup>で、台所の婦人<sup>ひと</sup>がこしらえてくれたお汁粉<sup>しるこ</sup>の、赤いお椀<sup>わん</sup>の蓋<sup>ふた</sup>をとりながら、燐子さんが薄いお汁粉を掻<sup>か</sup>き廻している箸<sup>はし</sup>の手を見ると、新聞の鉄箒欄の人は、自分を崇拜している年下の男の方が、我儘が出来るのは当然だがといったが、どんなところから割出したものかと思つた。昨日<sup>きのう</sup>までは、精神的の苦痛はあつても、いわゆる我儘な生活が出来たのだ。こんどは、精神的幸福はあつても、我儘な生活が出来るわけがないではないかといひたかつた。ほんとの、生きた生活に直面するのに——生きた生活とは、そんな生<sup>なま</sup>優<sup>やさ</sup>しいものではない。

長男香織かおりさんは生れた。生れる子供の籍だけは、こちらへほしいとは伝右衛門氏の願いだつた。柳原家で拒んだのだという。生れた子のことで、燦子さんは姿をかくさなければならなかつた。わたしは子供を離さずに転々していた燦子さんを、あんなに好いたことはなかつた。昨日は下総しもづさに、明日は京都の尼寺にと、行ゆ衛くえのさだまららないのを、はらはらして遠く見ていた。あとでの話では、かえつてその時分は経済的に楽だつたのだということ、何処かしらから物質は乏しくなく届いていた。愁つらかつたのは宮崎家の人となつてから、馴なれぬ上に、幼児は二人になり、竜介氏は喀かくけつ血がつづいて——ただ一人のたよりの人は喀血がつづく容体で——その時の心持ちはと、あるとき、語りながら燦子さんは面おもて

をふせた。

燦子さんは働きだした。達者たっしやに書いた。長編小説でもなんでも書いた。選挙運動には銀座の街頭にたつて、短冊たんざくを書いて売った。家庭には荒くれた男の人たちも多くいるし、廃娼はいしょうしたい妓ひとたちも飛込んできた。そのなかで一ぱいに立ち働らきもする。かつての溜息ためいきは、栄耀えいようの餅もちの皮だと悟りもした。

いつわらぬ心境を歌にきこうと、最近、以前のと近ごろとの歌を自選してくださいとおたのみしたらば、こんなのが来た。

### 筑紫のころ

われはここに神はいづこにましますや星のまたたきさびしき夜なり

和田津海の沖に火もゆる火の国にわれあり誰そや思はれ  
人は

われなくばわが世もあらし人もあらしまして身をやく思  
ひもあらし

その後

思ひきや月も流転るてんのかげぞかしわがこし方かたに何をなげか  
む

かへりおそきわれを待ちかね寝いねし子の枕辺まくらべにおく小  
き包

子らはまだ起きて待つやと生垣いけがきの間あいよりのぞく我家の  
あかり

子をもてば恋もなみだも忘れたれああ窓にさす小さなる

月

ああけふも嬉しやかに生いきの身のわがふみてたつ大地は  
めぐる

なんとという落附いた境地だろう。この安心立命の地を、武子さんはどう眺めたらう。おおそういえば、燐子さんは面白い話をしたことがある。武子さんが九州へゆかれたとき、伊藤伝右衛門氏は、筑紫の女王のところへ、本願寺の生いき菩薩ぼさつさまが来られるときいて有頂うちようてん天になり、座ぶとんは揃そろえて、緞どんす子、夜具類はちりめん、襖ふすまをはりかえさせ、調度は何もかも新しく、善つくし、美

を尽さねばならぬときめた。それはおなじ九州のある豪家へ武子さんが招よばれた時には、何千円かを差上げて来ていただいたというのに、我家わがやへは無償でこられるということより何より、それほどの人にわが成なりきん金ぶりと、何処にも負けない豪奢ごうしゃぶりを見せなければおさまらないのだった。それをふと、

本願寺さまだってお手許もとが——武子さんはそんなにおごつてはいません、といつてしまつたらば、急に見下げて、何もかも新しい調度は取消しにして、何もさせないので困つてしまつたということだ。

それが、何もかもを語つているとおもう。出来ない辛抱は、今の道にくるまでの、新らしい生活にもあつたかもしれない。けれ

ど、澄みたる月は暴風雨のあとにこそ来る。あらしはすぎた。燐子さんのこしかたも大きな暴風雨だった。

——昭和十年九月十七日——

燐子さんの生母おかあさんのことも、このごろわかったが、もうお墓の下へはいつていて、燐子さんは墓参りをしただけで、なんにも言えなかったのだ。若くて死んだお母さんは、柳橋でりようお良さんと名乗り、ひだりづま左 棲をとった人だった。姉さんは吉原芸妓の名妓だったが、その老女は、燐子さんを姪めいだということ、どんな親しい人にも言ったことがないほどかたいたった。この姉妹は幕末の外国奉行 新見豊前守にいみぶぜんのかみの遺児だと

いう。ここにも悲しき女ひとはいたのだ。

# 青空文庫情報

底本：「新編 近代美人伝（下）」岩波文庫、岩波書店

1985（昭和60）年12月16日第1刷発行

1993（平成5）年8月18日第4刷発行

底本の親本：「近代美人伝」サイレン社

1936（昭和11）年2月

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2007年8月13日作成

2014年7月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

柳原※ [# 「火+華」、第3水準1-87-62] 子 (白蓮)  
長谷川時雨

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>